

私はあの COSTA・CONCORDIA 号に乗っていました

堀江美保(ふじみ野市)



コスタ・コンコルディア号の元の姿

タイタニック号の事故からちょうど 100 年目、2012 年 1 月 13 日(金曜日)の午後 9 時 42 分頃イタリアのチビタベッキア港を出港した乗客乗員 4200 名を乗せた豪華クルーズ船コスタ・コンコルディア号は、トスカーナ沖合のジリオ島付近の浅瀬に乗り上げて座礁、死者 30 名、行方不明 2 名、負傷者 60 名の大事故を起こしました。やっと最近になって裁判が始まり、事故の真実が明かされ、船長の過失責任の有無などが裁かれようとしています。

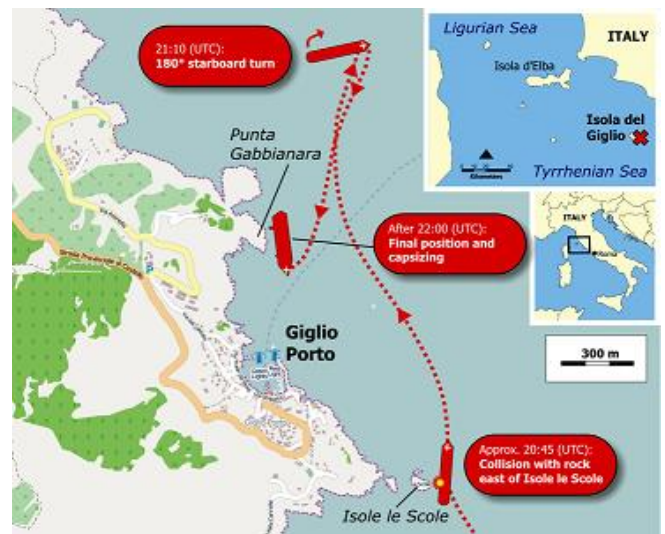
私は偶然にもこのクルーズツアーに 1 人で乗り合せていたのです。当日は午後 3 時過ぎに乗船。遅い昼食をリド・デッキでとった後、簡単な船内案内を受け、自室で夕食前の休息をとりました。夕刻 6 時からゆったりとしたダイナータイムとなり、その後はスタッフ・乗客の人たちとイタリア民謡を高らかに歌って楽しいひと時を過ごしました。そしていい気分自室に帰って来ました。

夜 12 時からラテン音楽のダンスタイムがあるとのことなので少し仮眠をとることにして、ベッドの上でうつらうつらとしていました。すると突然「ガターン！」とすごい衝撃音があり、同時に「ガチャーン！」とテーブルやドレッサー前の物や化粧品が勢いよく飛び散りました。そこではっと目が覚めました。9 時 40 分過ぎでした。廊下でイタリア人達の話し声がありました。だるい体と眠気でやっとドアを開けた時、イタリア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、英語、日本語、その他の順でアナウンスがありました。それによると「電気システムの故障が生じました。日本人の方は落ち着いて行動して下さい」とのことでした。電気システムの故障ならと、もう一度ベッドに横になりました。

しかし、廊下ではイタリア人達の声がますます騒がしくなってきました。再びドアを開けると大勢の人達が既にライフジャケットを着込み、大声で、「あっちだ！いや、こっちだ！」というように慌てていました。

びっくりして大急ぎでパジャマを脱いで上着を着、靴に履き替え、ライフジャケットを着用して 9 階の船室から急ぎ屋上に駆け上がり何が起きたのか確認することにしました。その時、何かを持って出るなどという余裕はまったくありませんでした。私は何回もクルーズ旅行を体験していたのでライフジャケットのあり場所はすぐにわかりましたが、避難訓練もまだ行われていない中でのことだったので、初めての方は大変だったようです。

暗い空と海の向こうの島に幾つかの光が見えました。それを見た時、「大海原の真ただ中ではないのだな」と少し安心しました。相変わらずアナウンスは繰り返されていました。



ジリオ島付近の座礁地点

突然、緊急サイレンが鳴り響き、みな急いで救命ボートへの階段を駆け下りて行きました。救命ボート乗り場は、ラッシュアワーの電車のようにひしめき合っていました。既に満員のボートが続出し、私は空きのあるボートを探し回って、やっとのことで 1 人分の席を詰めてもらって乗り込むことができました。幸運でした。既にクルーズ船は傾き始めていたのか、ボートに乗ろうとする時は坂を上るような傾斜を感じました。ボートはすぐには出ず、40 分ほどクルーズ船の近くでぐずぐずしていました。そして船から光が見えていた

あのジリオ島まで 30 分ほどかかったでしょうか、やっとのことで上陸することができました。空には何台かのヘリコプターが音を立てて旋回し、暗い海の向こうにイルミネーションで飾られた美しい私たちの乗っていた巨大なクルーズ船が徐々に傾いてゆく、海沿いでは大勢の避難した乗客達がそれを呆然として見ている、それはまるで映画のワンシーンのようで今でも忘れることができない光景です。



横転したコスタ・コンコルディア号

間もなく、近くの教会の扉を開けていただき、私たちはそこで2時間ぐらい過ごしました。その後、大型フェリーに乗りリヴォルノに移動、小学校の体育館に入りました。そこでは体の悪い人、怪我を負っている人の応急的な手当がなされ、軍隊や警察官の人たちから温かいミルクや紅茶のサービスが出されました。みな大変感謝していました。



座礁し、浸水・横転したコスタ・コンコルディア号

その後、何カ所かへの行き先別のバスが用意され、「ローマ方面行き」に私たちが乗り込んだ時は朝の8時を過ぎていました。あの恐ろしい夜の出来事から明るくなった朝にかけての慌ただしい避難がやっと終わったその時、「ああ助かったのだ！」とほっとすると同時に改めて着の身着のままであることを実感しました。

空港の隣のヒルトンホテルに11時45分頃到着し、そこでこのツアーを催行した旅行社から1人300ユーロが見舞金として支給されました。午後、早速身の回りの買い物のためにローマ郊外の大きなショッピングモールにバスで行き、当座必要なものを買いました。

ホテルには他の国の避難者や各国の報道陣が大勢いて、ロビーや廊下はごった返していました。日本の報道陣もいて我々のグループの何人かの人が取材に応じていました。

翌日の朝、ホテルの一室でパスポート申請のための書類を書き、写真を撮りました。その後お詫びのつもりだったのか、ローマ市内観光に案内されました。

しかし、事故の後の町歩きは気が乗らず楽しくありませんでした。翌日、出来上がったたった1回限り有効のパスポートを渡され、ようやく帰国の途に就きました。成田空港では皆一緒に別室に通され入国審査を受け、その後、指定された出口から出ました。すると、そこには黒いスーツを着た旅行会社の社員30人ほどが出迎えていました。私達一人一人にその社員が付き添い、表にズラリと待機していた黒塗りのハイヤーでそれぞれの自宅まで送っていただきました。

亡くなられた人が多数いて大変な事故でしたが、私の周りの日本人に人的な被害はなかったのは幸いでした。後で聞くと日本人の乗客は42名だったそうです。それにしても今思っても不思議なのは、あの危機的な状況にもかかわらず乗客にさほどのパニックは起きず、みな比較的落ち着いて行動し、さりげなく譲り合っていたように思います。あの時、船側はあえて本当のことを話さず、あのような「電気システムの故障」とのアナウンスでパニックが起こることを避けた、起こさせなかったと思えてなりません。

今はあの時の恐怖が少しずつ薄らぎ、夢の中の出来事のように思い出します。損害賠償請求に基づき船側からはそれ相当の補償を受けましたが、思い出の、あの思い出のあった私の大切な品々はもう戻ってきません。それが切なく悲しいです。

以上は2012年10月25日開催のWSCよこはま地区懇で私がスピーチした内容です。せっかくの貴重な体験なのだから会報に載せるようにとの勧めで投稿しました。会報に掲載される頃は事故から1年以上経過していると思われませんがご了承ください。

(写真：各報道機関の発表記事より転載)